

近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

さん ぽ う

三方よし

第42号

2017/3



中央玄関へのアプローチ



質蔵をリノベーションしたギャラリー質蔵



曳家を待つ質蔵



棟札が見つかった仕込み蔵



旧島崎泉治商店

近江商人旧宅を中心にリノベーションした「ふみの森もてぎ」

元禄16年（1703）創業の島崎泉治商店を中心に隣接する1900坪の土地に町有林材をふんだんに活用した「ふみの森もてぎ」（栃木県茂木町）が平成28年7月15日に完成しました。茂木町民の文化交流施設として図書館、展示史料館などを有し、中核施設の「ギャラリーふくろう」は弘化3年（1848）の棟札が残っていた仕込み蔵の部材を利用し、「ギャラリー質蔵」は蔵元の質蔵をリノベーションするなど、島崎家の歴史を伝える施設となっています。

本年1月31日から3月31日まで「ギャラリーふくろう」で企画展「近江商人 島崎利兵衛家」が開催中です。

（島崎利兵衛家については本紙に関連記事として紹介しております）

企画展「近江商人 島崎利兵衛家」

■期間：1月31日(火)～3月31日(金)（2月5日には末永先生らを講師に迎え第1回ふみの森もてぎ歴史フォーラムが開催されました。）

■場所：「ふみの森もてぎ」 栃木県芳賀郡茂木町大字茂木1720-1 TEL 0285-64-1023

平成28年度公開講座レポート

「近江商人が美術史に果たした役割」

—日野商人 島崎利兵衛（雲圃）らの活動を通して—

本年の三方よし研究所公開講座は、家族連れで大賑わいの滋賀県文化ゾーン内の滋賀県立近代美術館で開催しました。当館学芸員の國賀由美子さんの講演は、茶室にしつらえた「夕照庵」でお聞きし、その後は琵琶湖文化館所蔵の企画展を見学するという芸術の秋にふさわしい公開講座となりました。

近江商人は商売上手だが、儲けること一辺倒だ。と捉えられることが多く散見されます。この要因の一つが、彼らの文化貢献事業に関する情報不足なことが挙げられます。ところがすでに10年も前の事でしたが、滋賀県立近代美術館は栃木県立美術館と連携して、表題の企画展を開催されていたのです。

その後、滋賀県立近代美術館30周年記念巡回展の経緯を京都新聞「現代のことば」に記載されたことを知った三方よし研究所メンバーが國賀さん招聘に向かって走ったのです。「現代のことば」は本紙に転載。そして、今回の講演会となりました。当日は多くの絵画の映像をご紹介いただきながらの講演でしたが、紙面では制約がありますので一部割愛していることをご理解いただきたくお願いします。

今回は、日野商人の文化活動が中心でしたが、今後深く探っていきたいものです。



講師

滋賀県立近代美術館

専門学芸員

國賀 由美子 さん



日野商人「島崎雲圃」と日野の画家高田敬輔

近江商人の商業活動から生まれた
近江と下野のつながり

今日は、栃木県にゆかりが深い野洲市大篠原の小澤さん（こざわ）もお越しですが、栃木県には多くの近江商人がOutcomeしてあり、宇都宮美術館近くの「かましん」というスーパは、それこそ、小澤さんのご先祖がそのルーツです。

2005年に栃木県立美術館で当館と連携した「高田敬輔（けいこ）と小泉斐（ひ）」という企画展がありましたが、この時には近江商人の系譜につらなる「スーパかましん」にもご協力いただいたようです。

「かましん」は明治5年、釜屋新兵衛が創業しましたが、この方は、釜屋七兵衛（小澤七兵衛）家の番頭格で、小澤七兵衛さんが近江に引き上げられるときに営業権を譲られて創業されたものです。

ご承知のとおり、近江商人は、本宅は近江に置き、主人は年に何度か本宅と出店とを行き来していました。こうした往来の中から文人サークルのような集まりが生まれ、絵画などの指導を仰いだり、資金を提供したりす

る関係が生まれてきたのです。

この共同企画展の当館でのサブタイトルが、本日のテーマである「近江商人が美術史に果たしたある役割」でした。高田敬輔は近江ではよく知られ、多くの弟子を育てているのですが、画壇が活気づく18世紀後期にはすでに没しているのに全国的な評価は少し残念です。そして小泉斐は、近年だいたい知られるようになりましたが、全国的にはまだまだ無名の、敬輔が没して百年後に生まれた下野の画人です。

時代や生まれが異なる二人が結びついた理由には近江商人の存在があり、さらにこうした画人の活躍を後世に知らしめる活動を積極的に商人が行ったということを紹介しましょう。

文人にとって近江商人は大スポンサー

近江商人は、もったいない精神が旺盛なことから、世間では、大変ケチだと言われていますが、彼らは大きな財力があり、遠来からのお客さんをもてなすことが多く、こうしたもてなし方が半端ではないことに驚きます。



高田敬輔「竹林七賢図」(左隻)(信楽院)

そして、おもてなしを受けた画人や学者などが返礼の意味を込めて、書画などをプレゼントすることも当然あり、商家には個人的な繋がりの中からとどまった書画骨董の類も少なくはなかったのです。

画人や文人は、近江商人宅に逗留、あるいは道中を同行するなどの機会を通して、お互いの関係が深まっていったのです。

本日は高田敬輔を中心とした話の展開です。からどうしても日野商人が中心になりますが、五個荘や八幡でも独自の文化活動を行った商人が存在するとともに、商家に生まれて自ら画人・文人となった人も少なくはなく、本日はほんの一端であることをご承知おきください。

出店と郷里を行き来する中から生まれた文人サークル

日野商人であると同時に絵も描いた島崎雲圃という人がいます。この人は同郷の高田敬輔の弟子であり、日野と栃木を年に何度も往復しています。ご子孫が栃木で島崎泉治商店という醸造業を営み、栃木県立美術館で開催された企画展の際には「島崎雲圃」という銘柄の清酒を作するなど先人の功績を近年まで讃えておられました(二〇一四年

三月廃業)。この島崎雲圃の弟子に小泉斐という人がいます。

彼は、雲圃に付いて日野にやってきたおり、その帰りに水戸の文人仲間と待ち合わせをして、一緒に富士山登頂を果たしています。

富士山は多くの絵師たちがこぞって描いていますが、どれも

近江白野出身の画家「高田敬輔」(1674~1755)

本日の話しの中心にいる高田敬輔は、江戸中期の近江日野出身の画人で、名は隆久といい、竹隠斎、眉間毫翁、梅桃老人などの号をもちます。

敬輔は、狩野山楽から始まる京狩野派の4代狩野永敬(永敬)入門し、京都で修業し、師匠が亡くなられてからは、峨山(嵯峨嵐山)の鳳潭宗叡や知恩院の良照

義山に付いて勉強し、浄土宗の「選択本願十六章図」や、「無量寿経曼荼羅」を描き、それを板彫にして、印刷しています。

さらに、堺・阿波・京都・西宮・伊丹・鳴尾(いまの尼崎市)で、絵描きとして活動し70歳という当時としては老齢になつてから江戸に出ていき、芝増上寺の仏心院とか、小石川の伝通院、本所羅漢寺等でダイナミックに大型の絵をデモンストレー

が、遠くから眺めた富士山しか描かれていなかったのですが、富士登山を決行した雲圃の弟子、斐は、実際に見聞した富士山の火口を描いています。

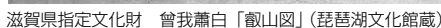
近江商人が郷里の滋賀と出店先の北関東あるいは東北とを行き来する間に、豊穰な文化の営みが生まれていったのです。

シヨンみたいなやり方で制作して、將軍をはじめとする人々に名前を売ってゆきました。その後は、日野に帰って梅桃庵に住んでいました。

江戸逗留前の享保20年には仁和寺から法橋をいただき、さらにその上の法眼という、当時は絵師の位でもある僧位を受けています。

敬輔の家、高田徳左衛門家は日野杉之神町にあり、後世の『文久元年辛酉三月改商人連名牒』に名前が見られるように、日野で漆器製造販売を業としていました。敬輔も、これを売り歩く傍ら合葉の調整販売も始めたよう

です。敬輔の作品の中には、黄檗宗の影響を強く感じさせるものも多く見受けられます。これには日野商人とも深く関わった地元



ここに、弟子の島崎雲圃が描いた高田敬輔の画像(図1)があります。すごく細長い形の掛け軸で、上の方には敬輔について書かれた賛文があります。建部箕山という日野出身の儒者が敬輔の生涯を記したものです。よく見ていただくと敬輔の眉間に黒子ほくろが一つあり、そこから3本、毛が生えていました。このことから自身の雅号として「眉間毫翁」を使っていたのです。

改浦には非常に多くの弟子が

敬輔には非常に多くの弟子がいました。その中の筆頭格が近江商人の島崎雲圃です。雲圃は代々「利兵衛」を名乗る下野国（現在の栃木県）茂木で醸造業を営む商家の第3代目で、名前は輔吉といいます。

島崎利兵衛家は、先述した清酒「泉月花」や「島崎雲圃」を製造していた島崎泉治商店です。島崎家は日野商人ですが、初代島崎利兵衛が下野で醸造業をはじめました。雲圃は、絵は敬輔に師事し、儒学は先述の建部箕山という日野出身の儒者に学びました。繰り返しになりますが左の敬輔画像は描いたのが雲圃賛文は箕山です。

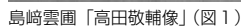
雪鼎

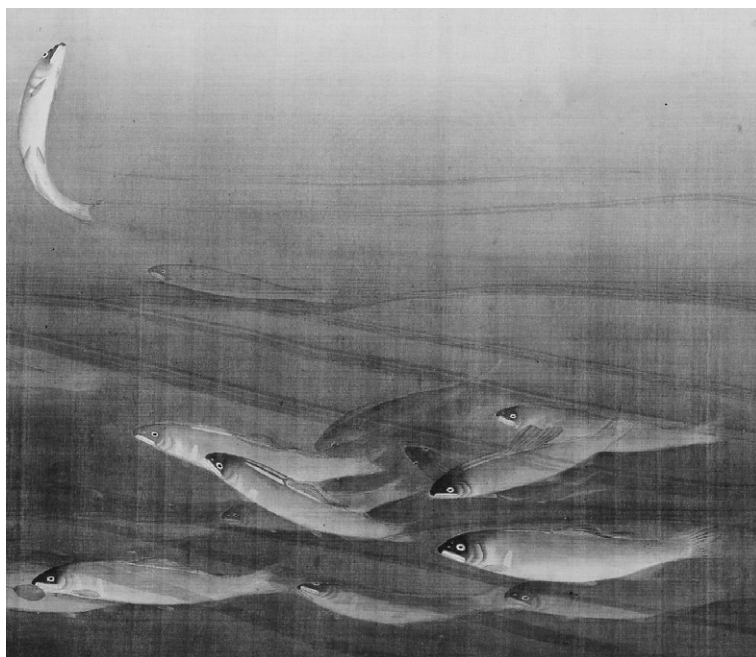
敬輔の弟子の中でも特筆すべきに、大坂で活躍した浮世絵師の月岡雪鼎や、異端と狂気の絵師として知られる曾我蕭白をあげる事ができます。いま会場（滋賀県立近代美術館）に展示している曾我蕭白の比叡山の絵は高田敬輔の絵と似通った部分があります。幾重にも重なる山並みや雲、雲の下に湖岸線がずっと描かれていて、地面から湧き立つようなもくもくとした図様は高田敬輔の雲の表現に近いといえます。これは元をたどると中国の水陸画の影響を受けているでしょう。

一方、門人の中でも頭角を現していた月岡雪鼎は、日野で敬輔に学んだ後は大坂に出て、浪速の浮世絵師として有名になります。内筆の美人図が有名ですが、敬輔の絵と似通った富士山の絵も描いています。

「没骨」技法の島崎雲圃

雲圃は、「没骨^{もつこつ}」という輪郭線を描かない絵画技法を、いちはやく人物画に取り入れた画人とされています。日本の絵画は線で輪郭を取るのが一つの基準のスタイルであり、その線描の美





小泉斐「鮎図」(部分)

敬輔、雲圃、斐につながる「鮎の絵」

しさが日本画のよさだと言われます。ところが、輪郭を線でたどらずに色付けだけで物の形を

表していく技法を用いて島崎雲圃は人物画を描きました。

日本の風景画は、それまで理想なる山水の姿を描く「山水図」と言われるものが多かったのですが、江戸の後半になってきて、自分が目の当たりにした風景をそのままに描く「真景図」が注目を集めるようになりました。同時に写生が重視され、

「写実」つまり実を写す絵画が重んじられるに至ったのです。こうした技法を用いたものとして雲圃の作品では、鮎の絵や梅の絵が有名です。

敬輔も、非常に鮎を好んで描いています。ただ、敬輔はさらっと、筆運びを楽しんで鮎の絵を描いています。これが島崎雲圃に伝わり、小泉斐に伝わってゆくうちに、「写実」の色あいを濃厚にしながら、この流派の代表的な画題となっていきました。

日野岡本町の曳山見送幕の下絵を描いた「小泉斐」

小泉斐は、下野国益子で生まれた画家で神官です。小泉家の養子になり、わずか11歳で島崎雲圃に入門し、儒学は水戸の立原翠軒に学びました。そして雲圃が関東と日野を行き来する際に同行したこともあり、日野岡本町の曳山の見送幕「五星神形図」の下絵を描いています。

日野祭は、日野商人の財力の大きさを示すものとして有名で、町内ごとに豪華な曳山を保有し、

黄檗宗萬福寺の「石條」に残る近江商人

近江商人と黄檗宗とのつながり、あるいは近江商人の財力を表すものとして、黄檗宗萬福寺に現存する「石條」があります。萬福寺は、宇治にある黄檗宗の本山で、その総門から三門に続いて、さらにはその中にも縦横無尽に、四角い石をひし形に並べた「石條」と呼ばれるものがあります。これは竜の背中を表しており、この上に立てるのは、かつては黄檗山萬福寺のトップ、住持の方のみというぐらい格式のあるものです。

境内の天王殿のすぐわきに「石條施主 江州日野」という文字をかすかに読み取ることができます。実際には、左に「石條施主 江州日野田中藤左衛門」、右側に同じように「矢野儀右衛門」という名前が入っていたのですが、現在では十分目視できません。しかしながら、萬福寺の資料によると享和3(1803)年にできたもので、田中、矢野の両名は日野商人であることが判明しています。二人は浄土宗の檀家でしたが、当時、憧れのニューウェーブの黄檗宗に深くかわかつていたことがわかります。

かすかに読み取れる寄進者名の刻印



境内を縦横無尽に走る「石條」



日野岡本町の曳山(上)(日野町提供)
屋根の飾り物は毎年趣向を凝らして作られる(左)



岡本町曳山の見送幕(下絵は小泉斐による)(日野町提供)

商人はその財力を地域の祭礼行事に惜しみなく拠出してきました。今も毎年5月2日、3日に盛大に馬見岡綿向神社の祭礼として開催されています。小泉斐の「五星神形図」は、日野岡本町の曳山の見送り幕下絵で、文政12年の年号に加え「下野檀山人小泉斐」とあります。

斐がもとと参考にしたのは、現在大阪市立美術館などにも残る中国絵画です。斐が写した模本は、近代になって著名な画家が持っていたことが分かっていますが現在では行方不明です。ただ、斐の弟子の島崎玉淵(島崎善兵衛家3代)がさらに斐の模本を写したものは、現存してい

ます。この小泉斐が儒学を学んだ水戸の立原翠軒は『大日本史』の編さんに関わり、水戸の彰考館の総裁まで務めていた人ですが、後には藤田幽谷と意見が対立して干されました。その前の寛政7年に関西に調査にやってきた帰り道に、日野からの帰路の小泉斐と落ち会って、富士登頂を果たしたのです。

斐は、文化13年に、下野(栃木県)の黒羽藩の大名、大関増業に招かれ黒羽鎮国社の社掌(神主)となり、御用絵師のように大関氏の求めに応じて絵を描く仕事もしていました。寛政7年の富士登頂の成果として「富岳真

状」を描きましたが、その浄書本(清書がき)「富士登岳図巻」が「富嶽写真」という名称で嘉永2年に出版されました。この

出版にかかる費用を拠出したのが、島崎玉淵をはじめとする近江日野、下野黒羽、常陸額田の文人たちでした。

日野ゆかりの画人らの書画帖を作成したのは 島崎玉淵の父、島崎種徳

島崎玉淵(3代島崎善兵衛)は、日野町大窪の出身です。同家は関東方面の行商から身を起し、宝暦元年、敬輔が亡くなる少し前に、下野国の烏山に呉服や荒物、現地特産の紙を商う支店を設けています。

し、商いの傍ら画人としても活躍しました。小泉斐を絵の師とし、斐は、黒羽城の中で仕事をしていたので、そこに玉淵も一緒に行って絵の模写を行っていました。

玉淵は、近江商人の通例に従い、家族を日野に残したまま年に数度、日野と烏山の間を往還

この人は非常に風景画が上手だったのですが、烏山との往還時の写生を元にした、富士山や木曾川をはじめとする真景図、



蒲生家の菩提寺、日野信楽院



高田敬輔作、信楽院の天井画

あるいは松島の真景図が残っています。玉淵の父、種徳は、交友のあった画人の書画を収集し、書画帖を作成したことで、ここ

に敬輔からの日野に縁のある人たちの交友関係を深く知ることができます。

敬輔没後50年に作成された『敬輔画譜』

『敬輔画譜』を編さんしたのは敬輔の孫にあたる谷田伯脩で、絵も描いたのですが、学者肌で、著作も残しています。この『敬輔画譜』は四冊から成り、第一冊目には、高田敬輔略伝が掲載され、日野の浄土宗の大聖寺の住職が、この文章を書いています。

信楽院の天井画

巻一と巻二には敬輔の作品を簡略にして描いたような縮図が載っています。例えば、信楽院の天井画から一部取ったものなどです。

巻の三冊目は、高田敬輔が勉強した和漢の絵画を集めています。お師匠さんの狩野永敬が描いたものや狩野山雪の絵があり、敬輔が学んだ絵でまとめられています。最後の四冊目は「附録」とあって、ここに子弟や門弟の作品が集められています。雲圃の描いた蛾蟻鉄拐や小泉斐、編者の谷田伯脩(谷伯脩)の絵も収められています。

日野の信楽院は、浄土宗の寺院で蒲生氏郷の菩提寺です。ここに高田敬輔の天井画がありますが、これは、浄土宗寺院の天井画としてはふさわしくありません。本来は阿弥陀さんが描かれるべきなのです。ところが、龍王の絵だとも言われているのですが、よく見ると、お釈迦さんの生涯にまつわる守護神図だと思われれます。さらに、韋駄天も描かれています。

韋駄天は非常に黄檗宗と関係が深い仏法守護の神です。やはり黄檗との関係があったと思われるかもしれません。もちろん当時の信楽院も、こういう天井画を描くということを許して描かれているわけですから、そのあたりには、檀家さんである日野商人と黄檗宗との関係があつて、それを寛大にも理解したうえでお許しになつて描かれていると思われれます。

敬輔らが活躍した時代背景と近江の地理的環境

江戸時代の初めに黄檗宗が日本にもたらされ、黄檗文化が日本の中で定着していきました。

加えて江戸中期から嘉永・安政という幕末の時期に近づいてくると、近代的な造形感覚も発達して、ただ一つ開港していた長崎から眼鏡絵も入ってきました。そして本草学や博物学が隆盛し、実証的な学問に注意が払われてきます。

こうした時代に、大坂の木村兼葭堂という商人は、実証主義を世の中に広げる役割を果たしたと言っても過言ではないほど、非常に奥深い見識を持つ、文人サークルの中心人物でした。画家も、学者も、文化人もいろいろな人が木村兼葭堂のもとに出入りして、そのサロンの中でいろいろなものを学んで、またそれを発展させていきました。

一方で長崎では、沈南蘋という人が中国絵画を伝え、それが江戸なり、京都なりに黄檗宗の寺院などを通じて広がりました。さらに黄檗寺院では出版文化も隆盛していきます。

敬輔は、黄檗文化が成立し、実証的な目が育まれていく過渡期に生き、次の雲圃、斐、玉淵は、

その実証主義が強く世の中に定着していった時代に活躍した人でした。

近江は、この国の中央ではありませんが、京都と密接に関連している土地柄で、絵画も非常に京都画壇と一体化しており、京都の画家が来訪し、逆に敬輔のように近江出身の画家が京都で学ぶことも多々ありました。さらに、交通の要衝で、日野は、伊勢と京都の途次であり、伊勢参宮の人々が立ち寄ったことも考えられます。また蒲生氏郷の移封で日野椀が会津塗りに発展する過程など、さまざまな文化の伝播がありました。

さらに地元大名の江戸藩邸の存在も見逃せません。つまり江戸屋敷を足場に、画人たちの活躍の場が広がったこともいえます。

高田敬輔の場合についてみると、仁和寺や浄土宗、続いて黄檗宗、さらには皇室と結び付く仏教界の権威と関わったことで、敬輔の画業は非常に飛躍したと考えられます。地理的、社会的な結びつきが商人と文化人たちの交流を深める要因となつたと考えられるのです。

商人の文化的素養

本日のお話しの資料の巻末に何冊か今回参考にした書籍を掲載していますが、その中に、冒頭にお話した「かましん」の前身の小澤家の『小澤家十代蕭鳳の人と時代』があります。この蕭鳳さんは河村文鳳という京都の画家のお弟子さんでもありました。

また、高田敬輔の子孫も島崎玉淵の家も、ご当主が俳句や生け花などを極めており、大きな商いを展開した商人たちはまた大変高い文化的な素養を持った人たちでもあったのです。

本日は日野商人の話が中心でしたが、近江商人はそれぞれのグループごとに、文化活動を広く展開してきていました。最後にはこうしたグループについて残された書画帖からご紹介しましょう。

近江商人の文化グループ

玉淵さんの父の種徳さんが集めた書画帖は、第一冊と第二冊に分かれています。ここに描いたり書をしたためた人たちは以下のグループに分類できます。その一つが、日野に関わるグループです。

高田敬輔の系列につながる画家や地元の人々、お寺のお坊さんのグループです。

次が、水戸および下野にかかわるグループで、島崎雲圃、立原翠軒、小泉斐が含まれます。

次は、本日は触れませんが、たが、仙台でも活躍した日野商人の中井源左衛門家が中心のグループです。中井家は仙台にも大きなお店を持ち、仙台出身の絵師や、仙台に逃避してきた江戸の狩野派の絵師、狩野梅笑の作品もこの書画帖の中には収まっています。

最後のグループが近江八幡出身の京の商家の出である伴蒿蹊を中心とする人々です。蒿蹊は京で生まれ八幡の自家の家督を継いだのですが、早々に引退して京に戻り、平安の和歌四天王として、和文の方で非常に名をはせた人です。蒿蹊と同様に、妙法院宮真仁法親王による文化サロンの構成員であった皆川淇園をはじめ、真仁法親王が重んじた呉春門下の画家たちも、この書画帖に描いています。

種徳が集めた書画帖は、単に諸名家の書画を収集したのではなくて、自家、つまり日野商人島

崎善兵衛家と、縁のある人々の書画を集めたものです。ここに描いている人全員とお知り合いであったというわけではないと思いますが、間に介在する人とこの種徳さんは必ず交友があったと思われる。

この時代は書画帖を集めることが富裕な方々の間では流行っており、単に有名人の作品を集めた書画帖がたくさんあり、そこちの方が主流なのです。ところが、この書画帖に関しては、島崎家の交流をつかんでいくことができる非常に貴重な資料であると思います。これはまさに近江商人の文化への関わりを、ぶさに伝えるものです。画家を育て、文人を育て、さらに自らも絵を描き、文章を書き、立華をするという、近江商人の文化活動の証左です。商売とは異なった文化への造詣が、きつと商売の幅も広がっていったのではなかったかと思えます。

(講演終了)



近江の先人に学ぶ

5月17日(※2015年)、「遊亀と靱彦」展が最終会場の宇都宮で終了した。滋賀県立近代美術館開館30周年記念展として当館が企画したこの展覧会は、昨年秋季に当館で立ち上げ、愛媛県美術館、宇都宮美術館と巡回し、半年以上かけてこのたび閉幕の時を迎えたのである。(中略)さて先日、宇都宮美術館で、この展覧会の講演の場をいただいた。冒頭まず申し上げたのは、栃木県と滋賀県の、江戸時代からのご縁の深さである。現在、宇都宮美術館近辺の方々が日々の買い物をする、地元の大手スーパーチェーンは明治5年の創業だが、創業者は滋賀県の人である。講演を聴いてくださった多くの方がご存じなかったようで、館長さんも驚いておられた。

江戸時代に滋賀県の商人は北関東に店を持つ者が多く、栃木県(下野)にも店舗を構える近江商人がたくさんいた。彼らは滋賀から人材を栃木の店にも連れて行った。スーパーチェーンのオーナーの先祖は主人から大店を引き継いだ、そんな元幹部従業員だったという。近江商人の主人たちは年に3度ほど滋

賀と栃木を行き来した。新幹線はおろか在来の鉄道もなかった時代である。書画もよくした文化人でもあった彼らは道中多くの人と交わり、交わりが別の交わりを生んで、文人サークルと称すべき集まりができ、立派な広域的文化活動を展開したのであった。

サークル内の文人には、商人のほか、武士で絵や文筆をたしなむ者が多かったが、なかにはプロの絵描きや学者たちもいた。彼らは商人の師となり、ついでその道に秀でた商人が今度は師となって関東の文人を育てる。こうして旅が日常茶飯事であった彼らは近江の自宅で遠来の客人をもてなし、名だたるプロであった客人の返礼や自らが旅の道中でしたためた書画が近江の自宅の蔵に蓄えられた。ときには文人仲間と待ち合わせて富士山に寄り道し、初めて噴火口の近景を画いた者もいる。近江商人であった師匠についてやって来て日野祭の曳山に胴幕を描いた栃木の絵描きもいた。近江商人の行き来は豊饒な文化の営みをもたらした。

古来渡来人が移り住み、仏教文化も花開い

た近江は、江戸時代においても文化交流のつぼであったのだ。近江商人というと「もったいない」の精神がひいては「ケチ」と誤解されたりする。しかし彼らは、文人仲間を手厚くもてなし様々な提供を行い、寺社への喜捨も惜しまない。今の「企業メセナ」以上に太っ腹で、何より人との交わりを大切にしていた。さて、実はわれわれ学芸員同士も全国規模で交流する機会が多い。初めに述べたような巡回する展覧会と一緒に開催したり、作品を借りたり貸したり、学芸員の信頼関係が館の運営に大きく関わると言っても過言でない。

もちろん美術・博物館以外の、寺社や個人の方からも作品をお借りするし、寄贈や寄託をしてくださることもあるが、やはり、人と人の信頼関係が根底にある。文化を介して広がる世界を多くの人と分かち合うためにも、近江の先人に学び、人との交わりを大切にしたいとしばしば思った半年間だった。

(2015年6月4日 京都新聞朝刊「現代のことば」より転載)

桐生市、みどり市へ近江商人企業の今を研修

昨年5月に桐生滋賀県人会の皆さまが日野祭り見学に来県されたのが契機となり、9月には桐生で特別例会開催の運びとなりました。

織物の町桐生に隣接するみどり市(旧大間々町)では熱心にまちづくり活動を展開されている「三方良しの会」松崎清さんに大変お世話になり、近江商人活躍の地で、地元の皆さまのあたたかなおもてなしの心に触れることができました。

日本一醤油「岡直三郎商店」を訪問

滋賀からバスで約6時間、群馬県大間々に到着。松崎さんのご案内で渡良瀬川畔の神明宮で参りを済ませ、市民の熱意でよみがえった「ながめ余興場」や大間々博物館を見学。その後、日野出身の岡直三郎商店の昔ながらの醤油仕込み蔵を見学しました。

旧大間々町は渡良瀬川の扇状地で扇の要の部分に位置するこ

みどり市大間々の近江商人の足跡

とから豊かな伏流水に恵まれ、日野出身の岡(直三郎)商店、奥村酒造、澤興八郎商店、日野屋などの近江商人がこの地で活躍したのでした。

岡直三郎商店の店舗横には醤油仕込み桶として100年以上使われていた杉板を再利用して「河内屋木道」ができており、松崎さんの説明では、「河内屋」の屋号で商いを始めた岡直三郎商店が、周囲の人々が使えるようにとの配慮で塀の外に設置した井戸を、「三方よし」の会のみなさんが、「三方よし」のシンボルとして保存するとともに、災



三方良しの井戸前で説明くださる松崎清さん



害時にも活用できるように修復整備されたとのことでした。奥村酒造は先年廃業されました。

だが、敷地内には醸造を行った形跡の高い煙突がそびえていました。



みどり市の岡直三郎商店全景

岡直三郎商店

天明7年(1787)日野町鎌掛出身の岡忠兵衛が、この地で「河内屋」という屋号で醤油醸造をはじめた。現在本社は町田市にあるが製造は200年以上続くこの地で行い、良質な醤油づくりにこだわる。「天忠」という醤油料理店や都内でのアンテナショップの展開など、醤油の魅力づくりを求めている。みどり市の店舗住居は国指定登録文化財になっている。

創業300年を迎えた(株)矢野の創業地内の「主の居室」で交流会開催

2日目は(株)矢野の鎌田実社長のご案内で、桐生天満宮にお参りを済ませ、境内近くで開催されている買場沙綾市を見学。この催しは、桐生伝統的建造物群保存地区で活動する皆さんが毎月1回、かつての買場の賑わいの復活をめざして開催されています。境内の骨董市と相まって大層にぎわっていました。

矢野の創業地は伝建地区の中心にあり、かつての酒造り関連施設は桐生市に寄付され市民活動の拠点になっています。交流会は、矢野園(創業地)の2階、昭和30年代まで、近江から出かけてきた主人が使用していたという「主の居室」で行われ、地域で好評の季節メニューの献立をご用意いただきました。



創業地に残る「矢野園」



矢野園「主の部屋」でお話いただく鐘田社長

(株)矢野

享保元年(1716)、日野商人矢野久左衛門が雑貨商として創業。酒造業や味噌、醤油の醸造へと事業を広げ、明治には染料や薬品に進出、昭和初期には百貨店の矢野呉服店の開業、お茶の販売へと拡大路線を続けてきたが、機を見るに敏感な近江商人の特性そのままに事業撤退も果敢に行い、すでに手放した醸造関連の施設は1994年に桐生市に寄贈。現在桐生市は「有鄰館」として市民文化交流・観光施設として活用している。

2002年には本社を隣接するみどり市に移転し、創業地は「矢野園」として中国茶喫茶のほか地域物産販売などを行う。現在、事業の中心は染料などの織物関連材料や包装資材のほか金属加工用の科学品やプラスチック成型機などで、産業構造の変化に柔軟に対応している。

(株)矢野の歴史について鐘田社長からご説明いただき、実り多い研修となりました。

この地で活躍した日野商人たちは商いに励むと同時に多くの地域貢献事業を展開されていることに改めて敬服したものでした。

※主の居室…矢野園敷地内の一角にある木造建物の2階は、昭和30年代まで近江から経営監督のためにやってきた主人の居室で、主人はここで帳簿の確認や支配人の営業状況を確認した。質素ながらも随所にこだわりが感じられる居室では季節ごとの小さなイベントが開催され、地域の人々の交流の場となっていた。

台湾経済人、研究者との交流

2013年、同志社大学が中心に研究が進んでいる「事業継承学会」に理事長の塚本喜左衛門が参加したことから、三方よし研究所は台湾における経済人や研究者との交流が始まり、一昨年には台湾経済人グループが京都、滋賀に來られ、東アジアにおける家族企業の発展と事業継承についての討論を展開しました。そして今回は、返礼の意味もあり、11月に三方よ

し研究所メンバーが台湾を訪問。東海大学では、陳教授から台湾における事業継承の問題点などの講義を拝聴し、その後、日台の違いについて討議するなど有意義な研修となりました。

近年、東アジアのみなさんが日本の事業継承についてかなり高く評価され、日本のスタイルに学ぼうという姿勢が旺盛です。今後深く交流を行っていききたいものです。



東海大学東アジア経済センターでは、事業継承を専門に研究されている陳介玄教授の講義を拝聴。



世界中に取引先がある台中近くのTUNGU社訪問。



工場見学後「誠実と信用」を経営理念に掲げる楊社長と活発な意見交換。

びわこ滋賀のひな人形まつり

すっかりおなじみとなった滋賀県下の近江商人のまちのひな祭り行事ですが、今年は、滋賀県下の8市町が、これまでそれぞれ単独で行ってきたひな祭り関連事業を「2017滋賀 びわ湖のひな人形めぐり」と冠して、共同で展開することとなりました。従来から県内各地で「ひな人形」をテーマにした催事を行ってきましたが、今年より「びわ湖のひな人形めぐり」を共通テーマとし、地域色に富んだ「ひなめぐり」を楽しんでいただけます。

共通事業としては、湖北エリア〔長浜、彦根〕・湖東エリア〔東近江、近江八幡、日野、竜王〕・湖南エリア〔草津、大津(石山・坂本)〕の3エリアのひな人形めぐり会場のうち、2エリアのスタンプを集めて応募できるスタンプラリーを実施します。抽選で各地域の特産品などが合計40名にプレゼントされるということです。

問い合わせ先

東近江市観光協会

TEL: 0748-48-2100

2017 滋賀
びわ湖の
ひな人形
めぐり

実行中

近江に伝わる歴史を感じるお雛さまや雛置、現代作家による華やかな創作のひな人形まで... それらには、いつの時代も変わらない子どもの健やかな成長を願う愛情が込められています。早春の近江、春の訪れを告げる雛櫓やひな囃子と併せて「びわ湖のひな人形」をめぐりませんか。

平成29年1~4月

びわ湖のひな人形めぐり連絡会
事務局：東近江市観光協会 TEL: 0748-48-2100
後援：公益社団法人びわこビジターズビューロー

日野町の新しい施設案内

旧山中正吉邸が「近江日野商人ふるさと館」としてオープン

馬見岡綿向神社参道に面する旧山中正吉邸は、天保期から醸造業により財を築いた日野商人山中正吉の本宅です。平成25年に日野町の所有となり、平成27年4月に歴史・文化財資料を保存・公開する近江日野商人ふるさと館として開館しました。本施設は明治・大正・昭和初期にかけての増改築により農家住宅と書院づくりと洋館が連なります。

てんびん棒

本紙で紹介しましたが、昨年は三方よし研究所の仲間と桐生を訪問しました。早朝、ホテルから伝建地区界隈を散歩しました。かつて訪れたまちなので、記憶が鮮明によりみがえってきたのですが、突如、啞然としたのはすっかり変わり果てた「買場紗綾市」の事務局の無残な焼け跡でした。事務局長の島崎さんにちようどお会いでき、最近火災にあったとお聞きし、寂しい限りでした。それでも当日は月1回の「買場紗綾市」の開催日とのこと、早朝より出かける支度をされていました。

会場を変更して開催されていた紗綾市は、多くの人々で賑わい、矢野さんをはじめ地元の方の熱気に包まれていたので安堵したものでした。日野出身の奥村さん、まちづくり委員長の森さんとの再会も感激的で、楽しく過ごしたものです。近江から遠くにやってきた近江商人の遺伝子が息づく桐生訪問となりました。まだ知らない近江商人活躍のまちをこれからも訪問したいものです。



場 所：蒲生郡日野町西大路1264
連絡先：TEL 0748-52-0008
休館日：月曜日・火曜日(祝日の場合は翌日)、祝日の翌日、年末年始
入館料：大人300円、小中学生120円

